

# 宿縁

三月号

千葉県市川市国府台五丁目二十六番三十九号

浄土真宗  
本願寺派 **中原寺**

TEL 0477-372102  
FAX 0477-372102

## 「浄土」・「阿弥陀仏」

### そして「信心」とは



数日前の某新聞の「朝晴れエッセー」に、仙台市のある女性からの記事が目にとまり、一服の清涼剤のようなものを感じました。

『道路には数日前に降った雪が残る寒い日の午後、近所のバス停から市バスに乗車。』

運転手は「路肩に雪があり滑りますから、降車の際は十分ご注意ください」と、親切なアナウンス。バリトン張りの澄んだ声にうっとり聞き入ってしまいました。が、それから間もなく「そのぼく、さつきから何回も降りるボタン押したよね。おじさん見てたよ」。母親とお兄ちゃんの3

人連れの家族。車内の乗客は一瞬、「どんな言葉が次に発せられるのか、一同固唾をのみ耳をそばだてた。」

「おじさんね、ぼくのように小さかった頃、降りるボタンが気になっていつも押したかったんだよ。ぼく、もう一回だけ押ししてもいいよ」と。ぼくは、「はい」と返事をし一回押しました。

それからその子の母親が運転手に何と云って下車したかは、あいにく聞き取れませんでした。バスが行き過ぎるまで3人で手を振り会釈をする姿がありました。運転手もそれに応え手を振る白い手袋が揺れていました。

てつきり怒られるかと思っていたら「ぼく」には、運転手の優しい言葉がどんなふうにも聞こえていたのでしょう。生涯心のどこかに楽しい嬉しい思い出の一つに残ってほしいと。

国中がコロナ禍の重苦しい暗い世相の中にある今日、日溜りの温もりの中にいるようなほのぼのとした車中でした。』

さてこの話からぼんやりとその光景を思いめぐらしながら「浄土」と「阿弥陀仏」の関係を考えてみました。

浄土真宗ではつきりしなければならぬことは、一つは浄土であり、今一つは阿弥陀仏(如来)ということなのです。

仏教にまつたく縁のない人には、「浄土」ってどこにあるの?どこかに浄土という場所があると思っています。だからそこに生まれれば何の不自由なく思い通りに暮らせるぐらいに勝手に考えます。そんな所は、在りはしません。また、「阿弥陀仏(如来)」は、いろいろな名前前の仏さまの中の一人ぐらいに思っているのも間違いです。私たちはその内容をよく知らなければなりません。

#### 阿弥陀如来とは固有名詞ではなく、すべての人びとを救うはたらきをいうのです。

そのはたらき(如来の場を浄土というのです。それでは「バス」を浄土と考えてみましょう。そして「運転手」を阿弥陀仏と考えてはどうでしょう。運転手のはたらきの場はバスです。バスはあらゆる人たちを乗せて目的地に運びます。運転手は乗客の安全と安心を与えて目的地でおろすのが役目です。乗客の不安を抱かせずに一人ひとりの気持ちをくみながら運転します。それはバスが運転手の場だからです。乗り合う人はそれぞれに違いを持っていきますがその折々に乗客に的確な声をかけながら和やかな場に仕上げてゆきます。その温かなはたらきに引き寄せられた人びとは、温かな心になって、そうでない人たちにその温かさを伝えてゆくでしょう。磁場にある磁石が釘を引きつけ、引き寄せられた釘が磁石の役目を受けて、他の釘に磁石のはたらきをするように。如来のはたらきに引き寄せられた人間は如来となって迷い苦しむ人を救うはたらきに参入するのです。「浄土真宗すなわち浄土真宗の法(教)をうかがうと、如来より二種の相(すがた)が恵まれるのである。一つには、私たちが浄土に

行き仏(如来)に成るといふ往相(おうそう)と、二つには、さらに迷いの世界に還って人々を救うといふ還相(げんそう)の功德が恵まれるのである」と、親鸞聖人はさと(仏)の本質について述べられています。

アインシュタイン博士が日本を訪れた折、仏教の話を知りたいと申し出ました。対談したのが大谷派の学僧近角常観師です。

「仏さまとはどういうお方ですか」。それに對して「姥捨て山」の伝話を話しました。

『その昔貧しい時代には、年老いた年齢になると口減らしのために親を奥山に捨てるという村の掟がありました。息子は仕方なく老いた母親を背負い山奥に分け入りました。山道が深くなると、負われた老婆は木の小枝をとり道に落としてゆきました。それに気づいた息子は、母が捨てられるのを拒んで家に戻ろうとの道しるべにしているのかと思ひ、捨て場に急ぎました。捨てていよいよ別れの時、母親が息子に言いました。「帰る道に迷いわからなくなったら、道に落としておいた小枝を頼りにして無事に帰っておくれ」と、わが子に手を合わせました。』

『この母親のすがたこそ、仏さまの姿であります。自分を捨てんとするものを見捨てることができない。こんな私に捨てられても、いつもそのものを慈しむ大きなはたらきを持っているのが仏さまです』と。

話を聞いたアインシュタイン博士は、涙を浮かべながら感動されたそうです。

仏さまを拝まない時も、拝まない人も、仏さまに常に拜まれていることに目覚めることを信心獲得と申すのです。

【寺灯雑記】

○常例法座がひらかれる

一月の常例法座が中止になったことに伴い、今年の初法座となった二月の常例法座がひらかれました。コロナウイルスの感染拡大防止のため、勤行も法話の時間もいつもより短めでの開催でした。

ご講師は築地本願寺のすぐお隣の法重寺から南條了瑛師をお招きしてご法話いただきました。

「如来の作願をたづぬれば 苦悩の有情をすてずして 回向を首としたまいて 大悲心をば成就せり」(正像末和讃)をご讃題として、阿弥陀如来が四十八の願いをたてられたのは、ひとえに苦しみ迷いの人生をおくる私たちを必ず救うとの大悲によるものであったとお話してくださいました。

【仏教語講座「彼岸(ひがん)」】

「暑さ寒さも彼岸まで」「ひがん花」「ひがんだんご」などと、彼岸は昔から日本人に親しまれてきた国民的行事です。

春分・秋分の日を中日(ちゅうにち)とし、その前後一週間のあいだ、寺々では彼岸会(ひがんえ)という法要がとめられ、先祖をしのび、墓参や寺院に参詣する期間となっています。

彼岸の中日にあたる春分の日・秋分の日、それぞれ法律で「国民の祝日」と定められています。そして、その意義について、春分の日は「自然をたたえ、生物をいつくしむ」、秋分の日は「先祖をうやまい、なくなった人々をしのぶ」と記されています。彼岸とは「彼(か)の岸」。文字通り、む

こう岸のことです。サンスクリット語「パラミター」の漢訳「到(とう)彼岸」を略したものです。

私たちの住む多い此岸(しがん)「此の岸」から、煩惱の川を渡り超えて到達する仏の世界、さとりの世界をいいます。

お釈迦さまは、此岸から彼岸へ到達するための道として「六波羅蜜(ろっぽらみつ)」の教えを説いておられます。

太陽が真東からのぼり、真西に沈んでいくこの日に、此岸の現実を反省し、彼岸の仏さまのお徳をたたえるのです。

(大乘2021年3月号より転載)

【「わからない」と悩む人とびつきり優しい人】

とびつきり優しい人

—中島岳志—

「歎異抄」は親鸞の弟子が、親鸞と対談し、そこで聞いた話をまとめたものです。そのため、親鸞の人格やパーソナリティといった実像が生きて伝わってきます。弟子の唯円が「念仏を称えても、躍り上がるような喜びの心がそれほど湧いてこず、少しでも早く浄土に往生したいという心も起こつて来ない」と相談すると、親鸞は、「あなたも同じ心持ちだったのですね」と応じます。

親鸞は「わからない」という人にとびつきり優しい人です。人間は煩惱から解放されるのが難しい生き物で、だからこそ阿弥陀仏の慈悲に包まれるのだと優しく説きます。しかし、「自分はわかっている」と胸を張る人には、厳しい人です。自分の力を過信する人は、自分が修めた善によって往

生が近づいたと錯覚するために、「ひとすじに本願のはたらきを信じる心が欠けているので、阿弥陀仏の本願にかなっていない」と言います。

私は「となりの親鸞」という言葉を、これまで親鸞に使ってきました。親鸞のことを考えると際、この言葉が一番しっくりときます。親鸞は遙か彼方の手の届かないところにいる聖人というよりも、悩める時にそっと寄り添ってくれる隣人のような存在だからです。自分がちよつとでも思い上がった心持ちになつているときには「歎異抄」を開いて、親鸞と対話するようにします。「歎異抄」は、親鸞の姿を身近に感じることのできる大切な一冊です。(季刊せいてん129より転載)

※中島岳志氏は今秋の文化講演会にご出講いただく予定です。

【法要・法座の案内】

☆春季彼岸会法要

並びに宿縁廟法要修行

\*三月二十日(春分の日・祝日)

一時||宿縁廟法要(廟前)

お勤め「重誓偈」

宿縁廟に納骨されている方、新たに納骨される方は十二時半に廟前にご参集ください。

一時半||彼岸会法要(本堂)

お勤め(讃仏偈)

法話||菅原伸郎師

(在家仏教協会理事長)

講題:「かのように」西條八十の場合」

春の彼岸会を迎える季節となりました。今年は暖かい陽気が続き、桜の咲く中での彼岸会となりそうです。どうぞ尊い仏縁を結ばれますよう、皆様のご参詣をお待ちしています。

○婦人会法座(正信偈解説)

\*三月六日(土) 午後一時

法話:前住職

○教行信証を学ぶ(信巻)

\*三月二十七日(土)午後二時

講師:前住職

○花まつり(お釈迦様のお誕生日)

\*四月四日(日)午前十時半

花御堂に安置されたお釈迦様の童形像に甘茶をかけてお祝いいたします。幼い子供たちの心の教育の場です。

○婦人会・壮年会合同法座

\*四月四日(日)午後一時半

○入門式

\*四月十八日(日)十二時半

新たに門信徒として当寺とご縁を結ばれ、入門される方々を仏前に奉告する式です。

○常例法座

\*四月十八日(日)午後一時

法話:熊原博文師

【三月の掲示板のことば】

人生を結論とせず

人生に結論を求めず

人生を浄土の縁と生きる